

近代日本文学史の中の「原田の森と関西学院」

——キリスト教主義教育との関連において——

細 川 正 義

一

かつて島崎藤村が神戸を訪れたのは明治二十六（一八九三）年二月のことであつた。藤村二十一歳の時である。藤村は一月に勤めていた明治女学校をやめ、関西方面への漂泊の旅に出、神戸を訪れたのであつたが、彼はまず、明治女学校を明治二十五（一八九二）年七月に卒業した後神戸山手にあつた頌栄保母伝習所（現在の頌栄短期大学）高等科に進学するために神戸に転居していた広瀬津欄を訪ねた。その日は彼女の紹介で神戸港の波止場に近い海岸通り四丁目にあつた畠中旅館に投宿、その後津欄の世話で須磨の漁師宅に寄宿したあと、高知の共立学校に勤めていた馬場孤蝶を訪ねている。

藤村が何故神戸を訪れたのか、一つにはこの旅が、藤村が憧憬していた松尾芭蕉の『笈の小文』（宝永六（一七〇六）年）に倣つての旅であつたことも見逃せないが、それよりも、当時の神戸の賑わいぶりにあつたといつても過言ではない。当時日本の外国への窓口としては横浜港と神戸港があつたが、神戸市の人口は藤村の訪れたころすでに十五万人に達し、横浜市の人口を上回っており、ヨーロッパへ向けての船はまだ港の規模が小さかつた横浜港ではなく

多くが神戸港から出航していた。神戸港はまさに西洋の香りを漂わし、日本の世界に向けての表玄関として賑わっていたのである。明治二十七（一八九四）年には外国からの輸入額においても横浜港を抜いて首位に立っていた。若い時から明治学院に学び西洋への憧憬を強く抱く藤村が、漂泊の旅を神戸に向けて旅だつていった理由の一つとして推測できよう。

関西学院が神戸市東郊の原田の森に誕生したのは明治二十二（一八八九）年九月で、明治二十四（一八九一）年には神学部の一回の卒業生三名を出している。藤村が神戸を訪れた明治二十六（一八九三）年には普通学部が二名の初の卒業生を出した年であり、十九名でスタートした関西学院は神戸の町の急速な発展と相まって成長をしていき、明治三十（一八九七）年には普通学部の学生が八十七名を数えるに至っている。まさに西洋へ向けての表玄関として活気を呈していく神戸にキリスト教主義教育の関西学院はふさわしく、神戸の街の発展と共に原田の森の関西学院も目覚ましい成長を遂げていくことになるのである。

近代日本に於けるキリスト教の存在は、キリスト教信者の数の推移がその一面を示しているといえよう。長年の鎖国とキリスト教禁教政策が解かれて、明治時代が始まるとともに急速に高まった欧化主義と相まってキリスト教への関心が高まり、布教も活発化してくるが、それを端的に示しているように明治元年に十名足らずだったプロテスタント・キリスト教信者の数は明治十八年には約一万人に達し、明治二十一（一八八八）年には二万三千人を数えるようになった。そのように着実にキリスト教信者の数が増えていく中で、明治二十二（一八八九）年に関西学院が原田の森に設立されたのである。関西学院の発展の礎はまさに、関西学院がアメリカ・南メソヂスト監督教会の信者たちの深い祈りと献金を母体にして設立され、学院全体が強くキリスト教教育の実践を進めていったことが第一の理由であり、その上に明治日本の外国との交流の表玄関としての神戸の地の活気を受けて進取の気運をもって学校がスタートしていったという二つの理由が合致したことによっているといえよう。そのひとつとして特記できるのが、開学した

その年の十一月にキリスト教の関西学院青年会を発足させていることである。

その関西学院草創期の関西学院青年会の記録を昭和五十一（一九七六）年十二月と昭和五十五（一九八〇）年十二月の二回に分けて蒐集、調査して関西学院キリスト教主義教育研究室から発行された貴重な資料集がある⁽¹⁾。「関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ」「Ⅱ」であるが、「Ⅰ」を発行当時の室長米倉充は次のように述べている。

思えば関西学院も大変な時代に呱呱の声を挙げたといえる。ところがこの青年会の記録で窺う限り、学院のキリスト者の学生たちにはほとんどそのかげりが見られない。彼らはその嵐などまったく風馬牛に、実に自由に暢々と、いかにも明治人らしいおおらかさで理想と情熱に燃えた学生生活を精一杯に送っている。その点反動の嵐をもろにかぶった東京の明治学院の場合などと、非常に異った状況を思わせる。恐らく開放的で国際的な明朗さに満ちた神戸のミッション・スクールとでは、学生気質もかなり異ったものがあつたのかも知れない。更に演説会の演題などにも人生意気に感ずといった慷慨調のものがかなり見られ、青年の事業欲、成功熱をそるようなものも尠くない。

米倉充が触れている「大変な時代」とは明治二十四（一八九一）年に起こった内村鑑三の「不敬事件」の影響のことを含めての動きを指しているが、このことがそれまで明治の近代化の中で急速に関心を深めていたキリスト教信仰やキリスト教倫理に対して、躊躇を感じさせることになり、また时期的にも狂熱の欧化主義が下火になり、国粹主義に関心を寄せるものが増加してくる時期とも重なり、「不敬事件」は国粹陣営からのキリスト教徒への恰好の非難材料になった。そのことは確かに、明治二十四年頃までのキリスト教信者の増加率と、不敬事件以後の増加率とを比較すれば明らかに窺える。ただし、米倉の指摘のようにもろに影響を受けた東京のミッションスクールに対して関西学院は、米倉の言う「風馬牛」のように全く無風状態であつたとは言えないかも知れないが、しかし、米倉の文章を見ても、関西学院の成長の歩みは、そうした時代の動きはもととせず着実に成長を遂げていたことが想像出来るので

ある。この米倉の確信は言うまでもなく、そしてその確信は、この、彼が室長として編集した関西学院青年会の記録によっていることは推測に難くないところであるが、私は、この米倉の指摘からもうかがえるように、そうした印象を米倉にもたらせた関西学院青年会の活動と、その関西学院青年会の残した「記録」に注目しなければならぬと考えている。関西学院青年会は関西学院が設立された明治二十二（一八八九）年九月の二ヵ月後に早くも結成されている。関西学院がまさに「開放的な明朗さに満ちた神戸」の地に、当時の日本の近代化を端的に示しているミッシェン・スクールとして出発したことが、関西学院発展の確かな礎となったことは先に触れたとおりであるが、より原動力となり得たのは、新進の気風を持って「理想と情熱に燃え」てキリスト教主義教育の関西学院に学びの場を求めて入学してきた学生たちがまさにその息吹きの中で主体的に活動を開始していったことがより大きな意味をもたらせているということが出来るのである。

関西学院青年会は明治二十二年十一月に発足しているが、初代会長は神学部一期生の中山栄之助、副会長、書記など役員は神学部の一期生が分担している。発足時の正会員は十六名で神学部学生に加え普通学部の学生たちも会員となっている。そして、そうした学生とともに、ランバス、ニュートン、アットレーや、日本人教師達も名を連ね、まさに教員と学生が一体となった関西学院キリスト教主義教育の実践の一端を担う重要な組織として出発していることがうかがえる。「関西学院キリスト教育史Ⅱ」の「序」によれば、その時の関西学院キリスト教主義教育研究室室長小林信雄は「最初は、青年会の会員には、教師も生徒も、平等であり、教師が役員になるのも学生の選挙によったと思われる。」と分析している。教員の主要メンバーも学生と「平等」の立場で会員となり、会長は神学部の一期生の学生が務めているという組織を見ると、キリスト教主義教育に対する全学的理解をもとにした自由で個人を尊重した関西学院の校風が育ち、関西学院の以後の発展の原動力となっていた基盤が形成されたのにも、この関西学院青年会の発足時の姿勢と密な関係性があるように推測できる。「関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ」の「はじめに」にお

いて名誉教授武藤誠は、

創立時の学生が神学部七名、普通学部十九名（南メソジスト監督教会日本宣教部記録）にすぎず、創立二十周年にあたる明治四十二年（一九〇九）までの卒業生累計が百十八名（内神学部卒業三十五名）であることを知るだけでおよその様相を推測することができよう。しかし規模の小さいこの期間に、信仰によって固く結ばれた師弟が一家族のように交わり、個性豊かな学園生活を営み、建学の精神が培われたのである。

と述べているが、草創期の関西学院の教育の要の一つに関西学院青年会の集まりが位置し、神学部と普通学部が一体となつて、信仰に立脚した学生の活動を展開しているところに、キリスト教主義教育を実践する関西学院の将来像の原点が形成されていく原動力にもなったことが想起出来る。本稿で注目する関西学院初期の文学活動においても、この関西学院青年会の発足時の精神がその活動の根幹に強い影響力を発揮していると考えられるのである。

「関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ」「Ⅱ」を今回は「文学」の面でのみ管見し参考にしてみるつもりだが、その視点で管見していくつかのことが目に留まった。

一つは久留嶋武彦の存在である。彼は明治七（一八七四）年六月に大分県玖珠郡森町に生まれ、明治二十（一八八七）年四月に大分中学校入学している。その年六月に南メソジスト監督教会宣教師サムエル・H・ウエンライト博士（ワシントン大学医学部卒）が英語教育のネイティブスピーカーとして大分中学に着任し、久留嶋は一年生の後半から、ウエンライト博士の講義を受け感銘を受けた。ウエンライトは自宅で英語の夜学を開き、聖書学校を設けたので、久留嶋はどちらにも熱心に学んだ。明治二十三（一八九〇）年ウエンライトは関西学院の神学部教授として招聘されたので、久留嶋はウエンライトに従つて、関西学院普通学部に入塾した。青年会会員名簿に久留嶋は明治二十三（一八九〇）年十月十三日に青年会に入会したと記されているので⁽²⁾、編入学してすぐに入会したことがわかる。記録には久留嶋の名前が度々記されているが、『太平記』の朗読であつたり⁽³⁾、講演であつたり、かなり積極的に活動

していることが窺える。二十六（一八九三）年には青年会の通信書記に選出されている。久留嶋が青年会の名簿に記載されているのは明治二十六年までで、二十七年の記録では「本会賛正員トナリテ以后盡カセラルル事ヲ承諾サル」と記載されており更に「久留嶋君夏期学校開校ノ節開キシ青年同盟会ノ模様ヲ報告ス」と記録されているので、正会員ではなくなっているがこの年も深くかわっていたことが推測できる。久留嶋は明治二十四（一八九一）年三月にキリスト教の洗礼を受けているので、ウエンライトの導きに加え関西学院の教育、とりわけ青年会での活動が信仰に導く役割を果たしたことが想像できるのである。彼は当時の生活を「乱暴な生活であつたが、真実の生活であつた。貧乏な生徒の集団であつたが、忘れ得ぬ愉快な生活であつた。」（『関西学院七十年史』）と回想している。久留嶋は明治二十八（一八九五）年に関西学院普通学部を卒業しているが、卒業と同時に「少年世界」に『近衛新兵』の連載を始め⁽⁴⁾、児童文学作家として開始するようになる。そのように久留嶋と関西学院の関係を見れば、彼が明治二十四年、十七歳の時に関西学院で洗礼を受け、関西学院青年会で積極的に活躍していたことは卒業後、児童文学者として活躍していった久留嶋に影響を与えていった重要な要素の一つとして注目に価するであろう。

もう一点注目されるのは、明治四十五（一九一二）年に関西学院神学部と高等学部の学生によって「関西学院専門学生会」が組織され、その学生会の発足によって一九一二年秋か翌年四月頃までに創刊された雑誌「関西文学」に關わるできごとである⁽⁵⁾。この「関西文学」が昭和三（一九二八）年二月号まで十九号発刊され、そのあと「木曜島」「文芸直線」などに引き継がれていくのであり、関西学院における初期の文学活動の礎を形成した重要な活動であつたことは間違いない。それ以前の関西学院には回覧雑誌「正気」（明治二三年創刊）、同じ回覧雑誌「新星」（明治三十二年創刊）、「関西文壇」（明治四〇年創刊）などがあるが⁽⁶⁾、本格的な文芸雑誌としてはこの「関西文学」が出發とみなしてよいだろう。その「関西文学」の創刊号は残念ながら現存していないが、一番古い大正二（一九一三）年六月十一日に発行された第二号を見ると、編集兼発行者名に松本益吉の名前があることである。松本益吉は明治三

(一八七〇)年八月十九日に広島市に生まれ、明治二十(一八八七)年、南美以神戸教会でJWランバスから受洗、関西学院神学部に入學。明治二十九(一八九六)年に渡米、アズベリー大学等で學び、明治三十五(一九〇二)年に帰国し関西学院神学部の教授となっている。彼は関西学院に入學した明治二十二(一八八九)年、青年會發足と同時に入會している。松本は明治二十三(一八九〇)年には青年會の副會長兼會計の役につき、二十四年九月には會長になつてゐる。そのように青年會で中心的存在として積極的に活動し、その後神學者となり、神学部教授となつた松本を發行者として「関西文学」がスタートしている点は注目すべきであらう。スタート時の中心人物である佐藤清教授は、第二号の卷頭に「適合せんとする心と破壊せんとする心」と題した文章を掲載しているが⁽⁷⁾、その中で、

・キリストは始自ら當時のユダヤ人の社會に適合しやうとした。彼れはバプテスマのヨハネの言葉を以て其伝道を開始した。「我は律法と預言者を破らんために來たのでない、我は之等のものを完成せんために來たのである」と言つた。しかし彼れは當時の人々に適合するには余りに偉大であつた。

・凡衆の趣味と信仰に適合しつゝ、猶之を更に高くおのれの趣味信仰の水平線まで引き上げやうと努力する心である。

と述べてゐる。佐藤清は東京帝国大を卒業後水戸中学の教師をしていたところを明治四十五(一九一二)年四月に関西学院に招聘されており、コルレッジ、キーツ、ワーズワースなど十八世紀英文学研究を専門にしていた。「関西文学」における佐藤清の存在は、『文学部回顧』のなかで、

「関西文学」の刊行も當時全く文藝的な雰圍氣に恵まれてゐなかつた関西地方に而かも堂々と「関西文学」と銘打つて出馬したとは実に素晴らしい勢といはねばならなかつた。事実彼等は眞摯な態度でそのスタートを切つた。佐藤教授を囲んで行くゝは「早稲田文学」「三田文学」にも匹敵すべきものにして、関西の一角より大いなる文芸運動を起こし次の時代の関西否日本文壇をリードせんとする程の意氣込みさへあつたらしい。⁽⁸⁾

と述べられているように、彼の「関西文学」での存在は大きな影響力を持っていたことが推測できる。その佐藤清が「関西文学」第二号で「関西文学」は、キリストの「適合」への意志を学び、「信仰に適合しつゝ」、「信仰の水平線まで引き上げやうと努力する」ことが必要だと述べているのは「関西文学」が、関西学院の文学活動の中心としてどのような方向を目指していくのが明確に伺えて、その意味でも重要な佐藤の存在であり、発言であると考えられる。発行者松本の存在、佐藤の意志などを見れば、「関西文学」が関西学院のキリスト教主義教育を明確に示した方向で展開しようとしていたことが窺えるのである。先ほしつて言えば、「関西文学」の文学活動はやがて「木曜島」や「文芸直線」に引き継がれていくのだが、このキリスト教主義教育をベースにした「関西文学」の創刊時の姿勢は「木曜島」や「文芸直線」になってからは明確な形では継承されなかったことを確認しておかなければならない。

三点目としてあげておきたいのは、今東光についてである。今東光は明治三十一（一八九八）年三月二十六日に横浜市で生まれ、父が日本郵船の船長をしていたので日本の各地を転々として、大正二（一九一三）年に関西学院に入學している。東光は翌大正三（一九一四）年の一学期で、牧師の娘と交際したこと、学院批判の文章を投稿したことなどの理由で諭旨退学になり、豊岡中学へ転校している。弟今日出海によると、

・ いちばん楽しかった時代は、中学時代の親父が船乗りをしていたころだ。

・ 当時の神戸は異国趣味の横溢した静かな町だった。山と海に挟まれた段だらけの町で、東光のロマン趣味はここであぐまねながら、若芽はあの時代の周囲からの無理解な弾圧を蒙ったといっても過言ではない。

と述べているように、今東光の関西学院中学時代は僅か一年あまりであったが、その期間は、明るく自由に過ごしたであろうことが推測できる。そしてその大正二年と大正三年の関西学院青年会の名簿に今東光の名が記載されており、青年会でも活動していたようなのである。もし「周囲からの無理解な弾圧を蒙つて退学する」ということがなければ、彼はキリスト教に更に接近していつて、全く違った方面での作家になっていたかもしれないと想像できるので

ある。

このように初期の関西学院における青年会の存在を管見してみると、以後の活発に展開していく関西学院の文学活動に関する萌芽期にキリスト教との関わりとその影響が想起出来、この土壌が関西学院を舞台に展開していく文学活動に何らかの特色を与えて行ったであろうことが期待できるのである。

二

この関西学院の初期の学生の姿をキリスト教との関わりの視点で描いたものとして徳富蘆花健次郎の『思出の記』がよく知られている。

蘆花は明治元（一八六八）年熊本生まれで関西学院と直接かかわった時はない。彼は明治九（一八七六）年、九歳で熊本洋学校に入学している。同年兄の徳富蘇峰が同志社英学校に入学、蘆花も明治十一（一八七八）年に同志社に入学したが、十三（一八八〇）年に退学している。明治十八（一八八五）年十八歳でメソジスト教会で受洗、直ちに愛媛県今治教会へ赴き、伝道に明け暮れる生活をしている。

『思出の記』は明治三十三（一九〇〇）年三月から明治三十四（一九〇一）年三月にかけて「国民新聞」に連載された創作であり、そのまま現実に照らし合わせることは出来ないが、まず時間設定で見ると、

明治十九年新年第一の日曜日に、僕はプラオン師から洗礼を受けた。洗礼を受けたその日に、僕は事の顛末を細かに書いた手紙と共に、小形の新約聖書を母に送り、且兼頭君について僕が信仰の親とも云ふ可き志津牧師にも年詞に添へて其由を報じた。（一六の一）

僕が明治十九年の上半はいとも平和に、著々関西学院の課程を趁うて行く間に、一たび心に射し入った新信仰

の光は実に驚く可き勢いをつて、内に漲り、僕の理想も目的も批評判定の標準も、要するに吾思想の風は何時しか悉皆一変してしまつた。(六の二)

とあるように、作品を明治十九(一八八六)年の上半期の出来事として設定している。明治十九年の新年に洗礼を受けた主人公菊池慎太郎が愛媛県宇和島から関西学院に編入学するという設定になっているが、この時間設定が明治十八(一八八五)年の蘆花の受洗と愛媛県での伝道活動の時を背景に設定していることが推測できる。しかし、関西学院の設立は明治二十二(一八八九)年であり、作品で設定する明治十九(一八八六)年ではないところにも関西学院を明確に捉えての作品ではないことが想像できる。蘆花が、主人公が学ぶ場所を同志社ではなく関西学院にしたのは、蘆花の受洗がメソジスト教会においてであつたことも関連しているかもしれないが、ただし、作中の関西学院の描写は実に丁寧に、特にキリスト教主義教育の徹底ぶりのその雰囲気をよくとらえていると想像できる。例えば次のような場面である。

・己に耶蘇教を以て精神として居る学校であるから、朝は授業の始まる前に必ず礼拝の式があり、日曜は無論安息日となつて居る。書生のテーブルには大形小形の新約聖書がのつて居た。夜十時頃に竊と玻璃窓から覗いて見れば、必ず一室に一人か二人は椅子に跪いて就寝の祈祷を捧げて居る。(略)其れでも耶蘇教の精神は校内に満ちて居た。

・月曜日の朝の起きにくさ(一週勉強の初日であるから)金曜日の夜の快よき、(関西学院では、日曜を心霊の安息日、土曜を肉体の安息日として、一週五曜を勉強日としてあつた)此は強ち僕ばかりでは無い、皆其様に言つて居る。

こうした描写のほかに、例えば「リウアイヴアル信仰復興」が関西学院に起こつたとして取り入れているが、これは関西学院でおこつた事ではなく日本においては、明治十六(一八八三)年に明治大学で起こり、関西に於いては、明治十七(一八八

四）年に同志社で発生した出来事であった。作品では関西学院で明治十九（一八八六）年頃に起こったように描いているように、作品全体は蘆花の創作としてなされているので、時間や状況などを含め、事実のままに描いたのではないものの、此の時期のキリスト教主義学校の雰囲気はよくとらえていると推測することは出来るし、草創期の関西学院に学ぶ学生たちの生活も、引用箇所のような『思出の記』の描写から想像することが可能ではないかと思われる。明治半ばになって、キリスト教が日本において次第に受け入れられ、信者の数も増加している実績は見られるものの、まだ国の全体としては旧弊な考えが多く残り、明治三十三（一九〇〇）年からイギリス留学を果たした夏目漱石ですら耶蘇教嫌いを公言して憚らず、またそれを受け入れる国民の考え方が強くあるなかで、あえてキリスト教主義学校に学ぼうとする青年たちがかなり真摯な信仰への求めや向学心に燃えていたことは想像できることであり、その意味でも、引用した『思出の記』に記されたような雰囲気は、関西学院でも窺える風景であったと受け止めることが出来るのである。

二二

草創期のキリスト教主義学校ならではの真摯な向学心、向上心の気風の中で文学への求めと、自己表現に対する強い意思については関西学院の初期の頃から、開学まもなく結成された青年会に対しての積極的な参加と、記録からうかがえる青年会の中での活動意欲を見ていく中で垣間見られることに注目すべきであろうという点についてはすでに述べてきたとおりであるが、更に文学活動に限定して見ていくならば、明治四十五（一九一二）年に私立関西学院神学校を私立関西学院と改称し、専門部を神学部と専門学部の二部に分けて、文科と商科からなる高等学部が設置されたことに伴い、翌年に文学会が組織されて、それをきっかけに「関西文学」が創刊されたあたりから活発な展開を見

せるようになっていったであろうことは先に記した通りである。

昭和六（一九三二）年一月に関西学院文学会が発行した『文学部回顧』は明治四十五（一九一二）から発行時の昭和六年頃までを回顧したものであり、この時期の文学部と文学会の状況と活動を知るうえで貴重な資料となるものである。特に活動が活発になる要因のひとつに専門学部がスタートすることで「関西学院専門学生会」が組織され、その学生会の名譽会頭に松本益吉教授を編集兼発行者として「関西文学」が創刊されたことであつたと推測できるが、更に見ていけば、この時に発行された「関西文学」は二十頁前後のリーフレット版であつたが、文芸雑誌として本格的な活動が展開していくのは、大正九（一九二〇）年になってあらためて第一号として体裁も雑誌形式にして発刊された頃からであることが窺える。この頃の日本の政治経済の動きから言えば、大正七（一九一八）年に第一次世界大戦後の経済的不安定の中でロシア革命を干渉するために行つたシベリア出兵があり、そのために多額の費用を要したこともあつて日本経済は大不況に陥り、米騒動なども勃発しているが、そうした困難な中でも関西学院の教育は次第に認知されていき、学生数も高等学部の学生を例に見ると、大正五（一九一六）年に二八〇名だったのが、大正七（一九一八）年には五二二名、大正八（一九一九）年には六三一名と増加を続け、昭和三（一九二八）年には、学生数には入学定員（二〇〇名）があるものの、受験者数は九六八名に達している⁽⁹⁾。

そうした機運の中で新生「関西文学」一号が大正九（一九二〇）年九月に発刊されるのであるが、頁数は一号が四十五頁、二号が四十六頁、三号が七十八頁、四号が六十頁とかなり充実したものを発行している⁽¹⁰⁾。その時の執筆者は岡田春草、西木草苗、鮫島麟太郎、村上謙介など比較的に固定されたメンバーが執筆しているようである。ダンテの『神曲』翻訳など英文学者として著名になる寿岳文章も第三号に詩を掲載している。「関西文学」が順調に発展していったのは、第一次のリーフレット版での発行の日以来、佐藤清教授の力によるところが大きく、新生「関西文学」になるとその傾向はより強くなり、執筆者のメンバーはよく佐藤教授の家に集まって詩の朗読会をやったり、

「三宮踏切りの近くのブラジル」というカフェに集まっては中央進出を狙って気炎を上げることもしばしばあったようである⁽¹¹⁾。「関西文学」は昭和三（一九二八）年二月に第十九号を発行するまで続くのであるが、当初の趣旨は、中心人物であった佐藤清が大正十二（一九二三）年三月に関西学院を去ったことによつて次第に後退しマンネリ化も進み、その頃から盛んに創刊されていく他の同人誌に押されるようになっていった。例えば大正十三（一九二四）年に改めて第一輯として出した「関西文学」（通しの号は九号）には

やつと出来上がったこの雑誌を改めて「関西文学」第一輯として出版する。それはこれまでの「関西文学」とはまったくその背景を異にしてゐるためである。だがその性質に於いては以前と同様純文芸的のものであり、且つ今後も亦さうであらねばならぬことを断つておく。

と記されていてそれまでと「まったくその背景を異にしてゐる」を認めていることに注意が引かれる。『文学部回顧』ではその変化を踏まえて「関西文学」も遂に同人誌になり切つた」と書きとめている⁽¹²⁾。今回、関西学院の草創期からの青年会の活動から大正二（一九一七）年の「関西文学」発刊にかけて、関西学院のキリスト教教育の文学活動に与えた影響に注目しながら見てきたが、この「関西文学」が佐藤清の退職を契機に大きく趣旨を変更して、当初は教員と学生が一体となつて発行するという特色を持っていたのだが、第九号あたりからは学生独自の編集によつて発行するようになり、当時盛んになってきていた同人のみで発行していく同人誌の方向に傾斜していったことが、時代の必然ではあったが関西学院の教育の展開においては残念な出来事であつたとは考えられよう。大正十二（一九二三）年に北原白秋・山田耕筰が主幹する詩誌「詩と音楽」で「新進十一人集」の一人として推薦され詩壇に登場することになる⁽¹³⁾竹中郁も「関西文学」九号、十一号、十二号に詩を掲載している。

「関西文学」に代わつて登場してくる同人誌としてまず現れたのが、大正十一（一九二二）年に「弦月」を改称して発行された「朱樂^{サンボ}」がある。手書きの雑誌で同人九名でスタートしている。創刊号は九十八頁に及び詩と小説が約

半々の量で掲載されている。手書きの「朱罨^{ザンゾウ}」は五号まで発行され、大正十三（一九二四）年十一月に活版印刷が実現し名前も「横顔」と改称して発行している。同人は十二名であった。執筆者としては高梨菊次郎、上社茂治、川口尚輝、堀経道などがしばしば名を連ねているが、大正十四（一九二五）年十月の第十号をもって終刊している。『文学部回顧』によると、

傾向としては「横顔派」として別に何等の色彩もあるわけではなく、只各々が友誼関係によるグループの雑誌として、その詩作なり創作なりを書くといふ処にあると言へるだらう。謂はゞ自分等の雑誌を持つてゐるといふ事に楽しみを見出す若人が持つ情熱の発露ともいひ得るのであらう。⁽¹⁴⁾

と述べているが、確かに関西学院の文学活動としては「関西文学」と並行して発行されており、次第にマンネリ化してきた「関西文学」に代わってこの時期を担った重要な存在ではあったが、その活動の成果としては特別注目される者は輩出しておらず、大きな展開としては次に登場してくる「木曜島」「文芸直線」を待つことになるのである。

ただその中でこの時期を表したものとして足立巻一が竹中郁を評した『評伝竹中郁 その青春都市の出發』（評論社）において

その頃の学院は何もかもが自由で豊醇^{マモロ}であつた。そして、竹中郁も坂本遼もその詩の骨格を学院の四年間で養つたのである。

竹中らが卒業するのとはほとんど同時に、三月十五日から金融恐慌が始まった。そのために就職口がなく、坂本遼は郷里に引き上げて田畑を打った。⁽¹⁵⁾

とのべていることが注目される。竹中郁が関西学院を卒業するのは昭和二（一九二七）年三月である。足立の言葉を借りるなら、一九二〇年代前半までは「自由で豊醇^{マモロ}」な関西学院のキリスト教教育が浸透し、それが文学を志す学生たちにも影響を与えていたことが想像できるところであり、金融恐慌などで世の中がシビアさを増していくにしたが

って、それはその頃の文芸活動に対して、そして同人誌の動きに対しても影響を与えていくようになったと推測することができるのである。

四

「木曜島」が創刊されたのは昭和二（一九二七）年六月で、「文芸直線」は昭和三（一九二八）年三月に創刊されている。「木曜島」は関西学院において初の詩専門雑誌として発刊され、命名は竹中郁によってなされている。発刊時はイデオロギッシュな傾向はなく詩人のみの雑誌を発行することを目的としてスタートしている。命名者の竹中郁は、昭和二年の六月に上京しており、同人は池田昌夫、岩崎悦治、西村欣二、山田初男、淵上昌彌ら十三名であった。しかし、このスタート時に同人誌としての独自の明確な思想を持っていなかったことが、やがて、中央文壇に巻き起されたプロレタリア文学勃興の機運の中で、その影響が直接的に「木曜島」のメンバーの中に浸透して、活動の方向に影響を与えてくるようになるのである。

一方「文芸直線」は、関西学院の英文科生のなかで文芸の創作を志す一年二年生二十五名によって昭和二（一九二七）年十二月に「関西学院文芸連盟」を組織し、それを母体にして昭和三（一九二八）年三月に創刊号が発刊されている。例えば山田初男が書いた創刊号の編集後記である。

大阪の多田文三等も風雲を覗ふてゐるし神戸関西学院の木曜島も驚異的に活躍するらしいし。茲元。鳴物入りでどんちゃんと宣伝して置く。

ぼくたちの運動に就いても種々な批評もあるが兎に角関西学院（文学部学生三百人を有する）内に一のダイナミックな文化的風潮をしたことは我人共に喜びとするところである。

行く行くは中央の新人達と固い握手を交はして力強い文陣を関西の一角に持ちたいと思つてゐる。

「関西学院内に一のダイナミックな文化的風潮」を起し、「行く行くは中央の新人達と固い握手を交は」すようになることを目指して集まった同人たちの思いとその勢いが、この山田の編集後記からよく伝わる。同人にはこの山田の他、池田昌夫、西村欣二、淵上昌彌ら、「木曜島」にも名を連ねた連中も入っていたが、おそらく二誌は同時期に関西学院でスタートした文芸同人誌であるので、その両方に同時に参加している者たちほど純粹に文芸創作に對する思いも強かつたであらうことが想像できる。しかし、この「文芸直線」の同人達には、山田の編集後記にあるような中央文壇へ進出することを目的とする者たちと、そうではなくむしろ、その中央文壇を敵と考える左翼的考えを持つ者とがいて、「文芸直線」第二号を発行した昭和三（一九二八）年五月に入ると、二つの考えは衝突し激しい渦を巻き起こすようになってくるのである¹⁶⁾。

「木曜島」も「文芸直線」も、その発刊時には、詩の發表であり、小説・散文の發表でありを主たる目的としているのであるが、やがて時代の影響をもろに受けた形で、本来の文芸への意欲とは異なるイデオロギー的な問題で翻弄されるようになってくるのである。

中央文壇においては、一九二〇年代に入るとプロレタリア文芸思想を標榜した「種まく人」が大正十（一九二一）年に発刊され、「赤旗」が大正十二（一九二三）年に、「文芸戦線」が大正十三（一九二四）年に登場している。更に大正十二（一九二三）年九月一日に関東大震災が発生し、東京全体を大混乱に巻き込む不安の中で、プロレタリア運動は拍車がかけられていくことになった。そうした動きが関西にも影響を与えるようになり、まず「木曜島」がその影響に直面するようになった。そのことには「木曜島」のメンバーとなっていた原理充雄（本名岡田政二郎、筆名に鱧十治も用いた）の存在が大きな影響を与えることになったようである。

原理充雄は明治五（一九〇七）年生まれで、山田初男と同年齢である。彼は、大正十四（一九二五）年に草野心平に

誘われ同人誌「銅鑼」に参加、創刊号からしばしば詩を掲載している。彼は関西学院に入学はしていないが坂本遼との関係で関西学院の詩人グループに接近してきて「木曜島」にも参加するようになる。「木曜島」に何らかの形で参加したのはおそらく昭和二（一九二七）年冬ごろからで、十二月発行の第一巻第三号に鱸十治の筆名で「アナキスト」へのノート」と題した一文を掲載している⁴⁷⁾。この原理の加入によつて「木曜島」は以後急速に左傾していくのであるが、しかし、同人たちの内実はさまざまであつたことは、昭和三（一九二八）年二月に発行された第二巻第二号に池田昌夫が書いた編集後記から伺えるであろう。

兎に角に生れて二才を迎えた我々の詩の内容も同人各自色々異つた点は勿論あるが発刊当時とは全体として可なり推移が見られやう。

而して其は寧ろ当然のことであつて少くとも我々が惰眠を貪つてゐなかつた事を示す^マでものある。我々は将来よりよき進展に努めるであらう。たゞ個人個人が如何なる方向、程度に発展してゆくかは今のところ問ふところではない。興味ある問題として諸賢の看視に委ねやう。

池田の文は、同人たちの動きは察知しながら、しかし同人たちで歩調を一つにしようという考えではなく、その動きがどのような展開をしていくかは、今後の変化を見据えつつ静観していようという態度を示した文であるように解釈できるが、おそらく同人の多くはこの池田の考えとそう違わなかつたのではないだろうか。しかし、そうした状態に納得できない原理は、更にこの年三月発行の第二巻第三号に「木曜島の緊急なる問題」と題して次のような文章を掲載した。

だから木曜島によつて得るところの感じは実に無氣力とそのグググとむちしみてくるものの欠乏意気地なさだ。そしてそれは「永い地味なちみつな息を殺すやうな基礎工事」をもつてゐない点、プロレタリアートの闘争の明確な認識の不足の中にその中から泡立つ激しいぢかのままの感情その不足の中にその力弱さと曖昧さとの原

因がある。そしてその無気力と意気地なさを揚棄し得るには自分自身が闘争から独立した存在であることの認識とプロレタリアートの闘争の中に××こむことに依つての非プロレタリア的要素の消し飛ばしにある。

僕は更にこれからの木曜島にそうしたものの消しとばしとむしりと叩き上げを希望する。それは闘争を通じてのみなされ得るだらう。(略) 闘争の中に入り込み闘争することに依つての非プロレタリア的要素のむしり取り消飛ばしその中のみ木曜島の緊急な問題の具体的進みがある。

この原理(鱻)の啓発文は「木曜島」同人達にかなりの動揺を与え彼らの考えを鮮明にさせていくことになった。昭和三(一九二八)年四月に発行した「木曜島」第二巻第五号には会員の小松常男の書いた「彼等の暗黒時代―木曜島及び文芸直線」と題した十一ページに及ぶ重厚な論文を巻頭に掲載している。そして昭和三(一九二八)年七月に発行された第二巻第六号の巻頭に掲載された鱻十治の「木曜島の更に緊急なる問題」とともに巻末同人の谷村生が書いた「木曜島の思出」の中の次の一文である。

プロレタリア文学はプロレタリアの心を心とするものでなくてはならぬ。而してプロレタリアの心とは今強権に向つて戦いつゝあるプロレタリアートの血まみれの闘争の姿である。そして我々がそれをよくなし得るには唯一つしか道がないそれは自分自身をブルジョアのアトモスフェアの中から抜け出してプロレタリアートと共に強権への戦ひに参加して戦ふことであるそしてこの道のみが我々を生かす唯一の道である。

我々はプロレタリアート解放のために詩を書くのではないプロレタリアートの欲求と心の不満がその表現を我々にせまるところにプロレタリア詩を書かざるを得ない点が存する。我々は真理の探求者社会の変革者プロレタリアートの良き働き手となることを欲する。それ故に血塗りになつて戦つて居る彼等の現実の闘争に参加しなければならぬ。

この鱻十治、谷村生らの文章が摘発され、「木曜島」第二巻第六号は発売禁止となった。「木曜島」はここで発行が断

絶することになるのだが、共通する同人達がいる「文芸直線」はこの「木曜島」の直面した危機に対して、同人達と詩誌の活動を吸収し一本化するという形で対応することになるのである。そのことを昭和四（一九二九）年七月発行の「文芸直線」第二巻第四号で淵上昌弥が「詩人倶楽部合併の宣言書」と題して次のように述べている。

今や詩壇のみならず、文壇も亦崩壊の過程を辿るものの如きである。これわれわれ志を同じくするもの相互に団結し、散文学との共同戦線を敢へてしかんとするところである。

かくて、われわれの活動は今後連盟機関誌「文芸直線」に於て為されるであらう。

「文芸直線」が「木曜島」とこのような形で合併したことは、当時の時代としてはやむを得ない事であつたかもしれないが、しかし結局は「木曜島」が昭和三（一九二八）年七月で終焉したように「文芸直線」も時代の動きに翻弄される形で運命をとにもせざるを得なくなるのである。このことを大橋毅彦氏はつぎのようにまとめている。

両誌の行く末を見た時、「木曜島」と「文芸直線」の前には、そういう個人的な文学の深まりや発酵などを忖度する余地のない局面が開かれていく。すなわち、前者の場合は、この雑誌を発展させるために同人は全日本無産者芸術聯盟（ナップ）との結びつきを強める必要のあることを述べた、鱗十治の「木曜島の更に緊急なる問題」が巻頭に載った第二巻第六号が発禁処分を受けたことによってそれ以降の発行の道が閉ざされ、後者の方も、この雑誌が果たすべき役割は、それがナップの全国的機関誌「戦旗」の地域誌となっていく点に存すると規定した、楠本定の「同人雑誌の問題」が載った第十一号（一九二八・一二）を、同人雑誌としての幕引きの号とした。

このようにして同人雑誌という運動体と決別していった彼ら学生同人は、（各自の世界観の把握）に努めていくために、より大きな運動体の渦の中に進んでその身を挺していくかどうかを自身に問いかけていかざるを得なくなる。⁽¹⁸⁾

純粹な文芸熱によってスタートした「木曜島」と「文芸直線」は結局プロレタリア運動の激化の中で翻弄され短命で

終焉せざるを終えなくなるのだが、その中では当然真摯に芸術への夢を追いかけて、努力してきた同人たちに対しても過酷な重荷を背負わせることにもなったのである。その端的な例が、昭和四（一九二九）年五月十九日に二十二歳の若さで自死の道を選んだ山田初男である。

山田初男が「木曜島」と「文芸直線」の同人となった思いは、先に引用した「文芸直線」創刊号の編集後記がよく物語っている。その彼の自殺を悼んで「文芸直線」昭和四（一九二九）年七月発行の第二巻第四号は「山田初男追悼の頁」として特集を組んだが、小板常男は「彼は死を覚悟して別れに來たのだ」と題した一文を寄せ、

山田の死は甚だ簡単なやうであつたが決してさうではない。彼が死を覚悟する迄の過程に於て、如何に苦しんだかは、到底僕らの想像に及ばないところである。彼が何の為に死を選んだかは、まとまつた遺書がないので判明しない。（中略）

「どうにかならなかつたものか!?」二言目にはこの愚痴が出るのであるが、實際もう少し生かして置きたかつた。彼が結婚でもすれば又彼の人生觀なり世界觀なりが、幾分か變つて、新しく生きる力を持つやうになつたであらうが、何れにしても現在の私は、前齒が一本抜けて、そのあとを舌の先で撫ぜ廻してゐるやうに「無」の寂しさを痛切に感じてゐる。

とその悔しさを述べている。また西村欣二は「初ちゃん」をいたむ」と題して、

初ちゃんとは「木曜島」同人として長い間交際した。「木曜島」が次第に左傾して、各々其發展と運命を共にしたが、初ちゃんだけはものまゝの初ちゃんとして何色にもそまらず初ちゃんのキズのまゝであつた。（中略）

純真であるだけ、初ちゃんは何等の歪曲なしに時代を感じた。¹⁹⁾

と書き、彼が最後まで何にも影響されなくて芸術の夢だけを追つていたことを振り返っている。それゆゑに急速に左傾していった「木曜島」にも「文芸直線」にも居場所を失つて、失意と孤独の中で死を選ばざるを得なかつたのでは

ないかと想像できる⁽²⁰⁾。山本歩氏が、

しかし当時にあつて我が道を貫けるほどには、山田の精神は強くなかった。山田は死の直前、自身が「イズム」を持たないことに苦悩していた。多くの友人はマルキシズムに傾いた。また周囲を見回せばダダイズム、アナーキズム、シュルレアリスムなど、「イズム」主義が次々と興っていた。そうした時代と周囲の雰囲気、山田に「イズム」主義を持つことを暗黙の内に強いていた。少なくとも山田はそうした圧力を感じていたはずだ。それに彼は耐えきれなかった。

(中略)

山田の文学は、多くが左傾化した同人間においては傍流にしかなり得なかった。しかし今日的に見ればむしろ画一化した他の作品よりも特徴的で才能を感じさせる。⁽²¹⁾

と指摘しているように、山田の作品が「今日的に見ればむしろ画一化した他の作品よりも特徴的で才能を感じさせる」という指摘はその通りで、彼の作品が特に詩人としての完成に於いては他の同人たちの域を抜き出ているということは彼の作品から感じ取れる。そうした芸術への感性が逆に「木曜島」「文芸直線」の左傾化の中で、孤立感を深め死に至らしめてしまったところにはまさに時代の悲劇性を認めざるを得ない。

しかし、昭和四(一九二九)年三月に関西学院が上ヶ原に移転し、最初の同人誌として「甲東学苑」が発刊されたが、その創刊号の巻頭言で、

勿論吾が関西学院はそれにも増して宗教的使命を擔ふてゐるものである。吾等は此の神聖なる役割を営む学院の存在を重しとしなければならぬ。而して吾が甲東学苑は又実にこの使命を無視するものではない。学問の深さに沈潜することは決して宗教的使命と衝突するものではない。更に詩を吟誦することは宗教的情熱に反するものではない。(中略) 学問と宗教との不調和を説くが如きは未だ学問の妙諦を解せざるものである吾等は学理を探究

する心のうちに自ら宇宙の聖なる力に触れんとするものである。

と述べていることに注目したい。「編輯後記」でも「文学部の三学科を綜合した雑誌を造り、それに教授団なども加へて、研究創作の発表機関としたい」という意志を持ち、「従来英文学会の一部に付属してゐた「関西文学」の解放と充実」を目指すものとして創刊したことが記されている。本稿では、関西学院の文学活動を、その源に、関西学院の草創期にいち早く出発した関西学院青年会による活動を見据え、その息吹が「関西文学」に引き継がれて、宗教と芸術を一体として追及して行こうとしていたところに、関西学院の発展と相待った形の関西学院独自の文学活動の展開を求めようとして試みてきた。大正末期から昭和初年にかけてのプロレタリア運動の活発化の影響で「木曜島」「文芸直線」の左傾化のやむなき動きも見、山田初男の悲劇もその中において確認してきた。しかし、その「木曜島」と「文芸直線」の断念のあとを受けて新規に登場した「甲東学苑」がこうして「関西文学」の当初の姿勢を確かめつつ、学問・芸術と宗教の密接なかわりをスタート時に明確に確認しているところにこそ、関西学院の草創の時から精神が確かなものとして流れていることが確認でき、此処に以後今日にいたる関西学院の文学と芸術の礎があるということを確認できるのである。

註

- (1) 「関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ 関西学院青年会記録」関西学院キリスト教主義教育研究室、昭和五十一年十二月二十五日発行。「Ⅱ」は昭和五十五年十二月二十五日発行。
- (2) 「関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ」四頁。
- (3) 「関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ」一九頁。明治二十五年三月二十一日、第五回例会にて「朗読太平記笠置山城攻ノ下條」とある。
- (4) 「少年世界は」博文館が巖谷小波を主筆に明治二十八年一月に創刊した少年向け総合雑誌。久留島は創刊の年に『近衛新兵』

投稿して小波に認められ、連載された。

- (5) 『関西学院通信』 No. 6、「学院史細見 原田の森時代の雑誌（その二）——学院の文学風土 むかし話——」平成四（一九九二）年十二月。

- (6) 『関西学院通信』 No. 5、「学院史細見 原田の森時代の雑誌（その一）——学院の文学風土 むかし話——」平成四（一九九二）年六月。

- (7) 『関西文学』第一期の創刊は一九二二年の秋か一三年の一月ごろに発行されていると推測されている。現存するのは第二号からで、発行は大正二（一九一三）年六月十一日、発行は関西学院専門学校学生会、編集兼責任者松本益吉となっている。リーフレット型で一九頁。佐藤清教授の記事は第二面の全面に掲載されている。

- (8) 『文学部回顧』関西学院文学会、昭和六（一九三一）年一月一日発行、四七頁。

- (9) 『関西学院百年史』通史編Ⅰ（平成九（一九九七）年五月二〇日発行、学校法人関西学院）三五五―三五六頁。

- (10) 『文学部回顧』五〇頁。

- (11) 『文学部回顧』五一頁。

- (12) 『文学部回顧』一一四頁。

- (13) 足立巻一『評伝竹中郁 その青春と詩の出版』理論社、一九八六年九月、一一三頁。

- (14) 『文学部回顧』一一〇頁。

- (15) 足立巻一『評伝竹中郁 その青春と詩の出版』一三〇頁。

- (16) 『文学部回顧』一二四頁。

- (17) 『木曜島』創刊号は昭和二（一九二七）年一月三〇日、関西学院文学部木曜倶楽部発行となっている。創刊号、二号には左傾の記事は全く見られないが、三号に鱗十郎の「アナキスト」へのノート」が詩の原稿と切り離した形で最後に掲載されている。

- (18) 大橋毅彦「一九二〇年代の関西学院文学的環境の眺望」『関西学院史紀要』第十六号、二〇一〇年三月、八五―八六頁。

- (19) 「文芸直線」第二巻第四号、昭和四年七月発行、関西学院文芸連盟。小板常男の記事は三十三―三十四頁。西村欣二の記事は二十頁。

- (20) 『木曜島』が左傾色を強めていく中で昭和三（一九二八）年四月発行の第二巻第五号で巻末に山田初男は「寸評」「詩神」三

月号の詩より」と題して、河井醉茗、金子光春、小野十三郎、目次緋紗子らの詩を評している。河井に対し「常に何かを求めようとするこの人の意欲が黒土に微温湯的にでも表現されてゐる。これだこの気持ちちが河井氏をして生活せしめてゐるのだ。」と述べ、小野に対しては「新鋭なる日本詩壇の一詩脈―」と評価している。いかなる状況にあつても、詩と詩作を見据え、真剣に進み行こうとする山田の意識が髣髴でさる記事であらう。

- (21) 山本 歩 「青年詩人・山田初男とその作品」『日本文芸研究』第六十三卷第一号、二〇一一年一月、関西学院大学日本文学会、五〇～五一頁。

* 本稿は二〇一三年一月三日（土）に神戸文学館にて「原田の森の青春譜―神戸の近代化と関西学院―」「Ⅱ部「躍動」と題した企画に於いて講演した原稿を加筆修正して成したものである。

本稿執筆に当たっては、関西学院 学院史編纂室所蔵の資料を多く閲覧させていただいたことを、感謝申し上げます。